

第32回 福島県特別支援学校PTA連合会研究大会に参加して

このたび、福島県特別支援学校PTA連合会 木曾会長よりご案内をいただき、11月11日(金)に福島県立大笹生養護学校で開催されました第32回福島県特別支援学校PTA連合会研究大会に全知P連会長、事務局長、顧問で参加させていただきました。以下、「大会要項」、「パネルディスカッション 一部」のパネラーの方々のご発言(一部分)をご紹介します。

第32回 福島県特別支援学校PTA連合会研究大会要項

- 趣 旨：障がいのある子どもたちの健やかな成長と、積極的な自立・社会参加の実現に向けて、各校PTAの実践報告を踏まえながら意見交換し、本県の特別支援学校PTAの一層の充実を図る。
- 主 催：福島県特別支援学校PTA連合会
- 後 援：福島県教育委員会 福島県特別支援教育振興会 福島県特別支援学校長会
(財)日本教育公務員弘済会福島支部
- 日 時：平成23年11月11日(金) 9:45～15:10
- 会 場：福島県立大笹生養護学校
- 日 程：

9:30	9:45	10:00	10:10	12:00	13:00	15:00	15:10
受 付	開 会 式		パネルディスカ ッション 1部	昼 食	パネルディスカ ッション 2部		閉 会 式

12:20～ミニコンサート

本田知美さん

- 開会式：
 - (1) 開会のことば
 - (2) 福島県特別支援学校PTA連合会 木曾会長 あいさつ
 - (3) 来賓祝辞
 - (4) 来賓及び指導助言者紹介
 - (5) 閉会のことば
- パネルディスカッション
○テーマ：「震災時に障がいのある子どもたちにどのような支援や連携が必要か」
絆 ～その時私たちは、そして今私たちは～

※ 災害時何が起こったのか それによってどう行動したのか その経験から
今言えることを体験の中からお話していただきます。

○パネラー

- | | | | |
|----|----------------------------------|---------|---------|
| 一部 | ・富岡養護学校 | P T A会長 | 今野 貴文 氏 |
| | ・平養護学校 | P T A会長 | 上遠野由美 氏 |
| | ・聾学校 | P T A会長 | 藤田 安宏 氏 |
| | ・盲学校 | P T A会長 | 小野 洋子 氏 |
| 二部 | ・郡山養護学校 | 前校長 | 渡邊 世子 氏 |
| | ・社会福祉法人 牧人会 知的障害者更生施設
あだたら育成園 | 次長 | 渡邊 中 氏 |

○コーディネーター

帝京科学大学生命環境学部 教授 滝坂 信一 氏

○指導助言 福島県教育庁 特別支援教育課 指導主事 鈴木龍也 氏
社会教育課 社会教育主事 双里義和 氏

9 閉会式：

- (1) 開会のことば
- (2) 福島県特別支援学校P T A連合会 木曾会長あいさつ
- (3) 閉会のことば

パネルディスカッション 一部

*聾学校 藤田会長

- ・高等部2年生の聴覚障害のある息子さんは、高等部の入試のため休校。一人で在宅中に被災。その時、彼が取った行動は・・・

激しい揺れ⇒台所のガスの確認⇒テーブル下にもぐり、揺れがおさまるのを待った
⇒庭の松の木へ移動⇒揺れがおさまるのを待つ⇒台所の片付け、食器棚から食器が落ち
ないようにガムテープで固定⇒近所の一人暮らしのおばあちゃんが気になり、様子を見
に行った⇒近所の方から、おばあちゃんは通院中で難を逃れていることを知らされた。
⇒父親の車が戻るのを確認し、身を寄せていた近所の家から帰宅

このような行動ができたことに親として、感動した。

- ・学校は、14日から避難所に指定され、先生方は、本来業務と並行して避難所を運営。献身的な対応であった。
- ・調理室を使用し、温かい食事の提供もされた。
- ・卒業式は中止。校長先生が個別訪問され、一人一人に卒業証書を手渡された。(いつか式をしたい)

- ・危機管理意識の大切さ、家庭・地域・学校との連携、組織同士の連携の必要性を痛感。
- ・「障害のある子」への再認識をした。12年前に「地域で助け合う地域づくり」のため、緊急連絡網をご近所同士で共有することを呼び掛け（20軒中19軒から賛同を得て実行）息子の状態を知らせていたことが今、役立った。

*富岡養護学校 今野会長

- ・警戒区域の中に学校があり、立ち入りできず、学校は閉鎖、PTA活動もできない状態。
- ・東洋学園に入所しており、3月14日迄、子どもの避難先がわからなかった。3箇所を移動し、現在は千葉県鴨川市青年の家に避難し、区域外就学をしている。安房特別支援学校の先生方の訪問教育により、小・中学部が午前中2時間、高等部が午後2時間の指導がある。が、このままの教育には不安を感じる。
- ・《コーディネーターからの質問：どうかたちで学校が再建できるとよいか?》
⇒当初は、いわき市に場所を確保し、仮設住宅を造り、学校も同じ所に造るような話があった。そのようなかたちがよいが、話が進んでいない。

*平養護学校 上遠野会長

- ・地震が起きた時は、ほとんどが下校しており、寄宿舎のある学校なので、夜7:30頃には子どもたちの引き渡しは終了。
- ・沿岸部の分校も今は普通に学校が再開できている。
- ・転出者も戻ってきている状況。
- ・3月よりも4月の余震による地鳴りと揺れで子どもがパニックを起こすことがあった。
- ・医療ケアの道具が入手しにくく、伝達経路もなかった。平養護学校には医療ケアの必要な子どもたちがいることを知っているはず・・・。団体・施設では対応するが、個人では対応しないというものだったようなので、疑問を感じる。

上記のことについて、会場の方から以下のご発言あり

障害児者宅に物資を届けにくかった。特別支援学級、特別支援学校にも届けたかったが、個人情報保護が届け先を特定する邪魔をしていた。届けたいのに届けられない状態があったのも事実。

*盲学校 小野会長

- ・仕事柄すぐに迎えに行けず、家族に子どもの対応をお願いした。
- ・ある生徒の様子を紹介：白杖の生徒が下校中、電車内で被災し、途中駅で下車。タクシーに相乗りさせてもらったが、道路の寸断により自宅には帰れなくなった。が、乗り合わせた方の家で泊まらせてもらった。
- ・震災後、音声信号も絶え、道路を渡ることが怖かったという話を聞いた。また、避難所でのマッサージサービスをし、社会貢献できたという思いになった方もいる。
- ・常に放射線の数値が高い。住んでいてよいのかという葛藤がある。避難したくても避難できないという苦しさがある。

◆参加させていただいた感想◆

震災直後の子どもたちの様子を福島県特別支援学校PTA連合会の皆様と同じ目線で振り返

ることができ、参加する機会をいただいたことについて大変ありがたく思っています。

復興に向けた取り組みや支援の傍らで、原発事故による不自由な避難生活を余儀なくされている方々、見えない放射能への恐怖に耐えながら県内で生活している多くの方々のことを、私たち一人一人が自分自身のこととして考えていく必要があります。課題は山積していますが、福島県だけの課題ではありません。全知P連として、防災について考え、できることを検討し、発信していくことが必要であると思います。